最後の給食に思う

昭和五一年度　六年女児

学校で給食を食べるのも今年で終わりだなあと思うと、今まで給食を作ってくださったおばさん方に、「ありがとう。」とお礼を申し上げたいとともに、私は、今までの自分をはずかしく思います。

それは、今まで給食のことに対して、「こんだ給食よりだば、弁当の方がよっぽどいい。」とか、「なんでこの世さ給食あんなんけ。給食なんかねぐなればいいな。」などと言ったことがあるからです。

けれどもこの頃は、今まで一生けん命給食を作ってくださったおばさん方に感謝したい気持ちでいっぱいです。

それは、今までの私は肉がきらいで、食べるのにとても苦労しました。ところがこの頃は、鳥肉もぶた肉もどうにか少しずつぐらいなら食べられるようになったからです。これも、おばさん達が、愛情をこめて私達のために作って下さっているのだとわかるようになったことが、肉を食べようとした一番大きな原因だと思います。

低学年の頃は、給食に肉がつくたびに「午後の授業をやらないで、学校からにげ出したい。」といつも思ったものでした。

こんな私でしたが、十二月二十四日の給食記念日のこんだては、一年に一度の楽しみでした。給食記念日の前の日ともなると、友達と「今年は何つくあんでろ。きょ年なもおいしけんでも、今年もっとおいしなつげばいちゃ。早ぐあしたなんねがなあ。」などと話しはじめるのです。

いつもは給食をいやがっていたのに、特別においしいものがつく日だけ、楽しみにするなんて、私は自分をなんてがめついんだろうと思います。そして、「ふつうの日の給食にだってたくさんの人々が心をこめて働いてくださっているんだ、何も特別な給食記念日の時だけ苦労して作ってるんじゃないんだ。」と、こう自分に言いきかせたりもします。

私のほかにも、同じように給食がきらいな人がいるかも知れません。でも、私のように六年生になって給

食についていろいろ考えてみると、必ず「給食があってよかったなあ。」と思うことでしょう。

私の一年から六年までの担任の先生がよく言っていました。先生の小学校の頃は、お弁当のおかずといえば塩びきの魚とつけ物が入っている位で、肉なんてふだんは食べる時はありませんでしたよ。」と。

「それに、昔の六年生と比べて今の六年生は身長が十センチも伸びているのですよ。」と。

私は、先生の昔の話を思い出して、あと残り少ない給食の期間を、残さないようにみんな食べたいと考えています。

給食の関係の方々、どうもありがとうございました。